「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて ㊹

リレーエッセイ

親子登山で〝ガキ大将〟

住田町上有住　佐々木　輝昭

住田町立上有住小学校会議室。PTA会長と四名の副会長で平成十二年度のPTA事業実施の担当部長を決める。佐々木慶逸会長から私に提案されたのは育成部長。

「今年は五葉山登山がある。七月二十三日と日程は決まっている。計画から実施まで育成部長が担う。輝昭さんよろしく」

何と言うことだ。十二年度の育成部長が俺だって？登山とは全く縁がなかったのに。困ったことになった。実は私は登山が嫌いなのだ。登山をしたこともない。戻ることはできない。進むしかない。

登山のインストラクター依頼や五葉山麓にダムを建設中の鷹生ダム事務所に見学をお願いし、了解を得る。文書連絡は事務局を務める石橋浩義教頭先生に進めていただく。

「どうせやるなら楽しみながら計画づくりを進めよう」と心を切り替え、真正面から登山を見据える。

赤坂コースは楽だとは言うが、どんな道なのか。休憩場所、危険個所、体調を崩した方への対応はどうするか。長い隊列となる集団登山での状況把握と情報伝達の方法などをどうするか。不安なこと、心配なこと、その一つ一つを取り除いていかなければならない。

PTA役員とインストラクターの方々で事前踏査を実施した。「暑い」「疲れる」「ばてる」――一回目の事前踏査で受けた五葉山登山の洗礼である。台風通過の翌日に行った二回目の事前踏査でようやく不安や心配が薄くなり、自信めいたものが湧いてきた。

五、六年生とその保護者の参加者名簿、子どもたちへの事前学習、十五分登山・五分休憩、無線の電波チェック、危険個所の確認など準備は順調に進んでいる。一週間前からはその日（七月二十三日）の天気が気になり出した。

登山当日は朝五時に起床し、すぐに空を見る。明るい水色の空がどこまでも広がっている。「大丈夫だ。いける」と、事前準備事項を再チェックし、家を出る。どこか緊張する。

学校での出発式、バスでの移動、鷹生ダム建設現場視察、大船渡市日頃市町の赤坂峠登山口からの登山開始など、一日の取り組みをイメージする。

百十三名が赤坂コースから登山を開始。畳石を通過。坂本地区の四班の児童がハチに刺されたという情報。「落ち着け、落ち着け」と自分に言い聞かせる。

「救急セットは四班にある。応急処置後の容態によっては下山せよ」「濱口無線基地局へ、これより親子三名で下山する。病院へ行くのであれば救命救急センターへ」と指示。救急車両用として二台の車の配置が生きた。保健の滝本先生の待機もよかった。

「どうとう登山の日がやってきた。山登りが苦手な私がみんなについていけるかとっても不安。心の中で『嫌だ、嫌だ』と思いながらの登山」「一生の思い出となった登山。一カ月も前から不安でした」

児童や保護者、先生もが億劫さ、不安、心配を抱えての上有住小学校「親子五葉山登山」。平成十二年度『五葉山登山の記録』には、それぞれの登山への思いが綴られている。

三百六十度のパノラマが楽しめる頂上部、日枝神社での集合写真には不安や懸念が秘められていたとは思えない。一人ひとりの笑顔が連続する。ハチに刺された子どもの容態が無線で届く。「大丈夫」とのことにホッとする。無事であることをみんなに連絡。

学校に戻り、最後の点呼が行われる。「一班異常なし」「二班異常なし」「三班異常なし」そして最後の班、「四班異常なし」。

不覚にも涙がこぼれた。安堵と達成感かもしれない。忘れ得ぬ満ち足りた一日となった。

上有住両向からは五葉山の頂上部から南西に延びた黒岩が見える。ラクダのこぶのような稜線を帰宅途中で見るとき、百十三名の〝ガキ大将〟として私を鍛え、育んでくれたあの日のことを思い出す。

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、五十四歳。平成十二年度の上有住小学校PTA育成部長。同校の伝統的行事「親子五葉山登山」の担当部長として、育成部員やPTA理事の声をまとめ上げ、練りに練った登山計画をつくりあげる。

事前踏査を二度実施する周到さが、不安や心配を持ちながらの登山を楽しく、思い出深いものにした。その一生懸命さに「ありがとう」「おかげさま」と感謝とお礼の声が多く寄せられている。

仕事からの帰り上有住両向から望む五葉山の稜線。ラクダのこぶのように見えるのが「黒岩」